

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 5 月 18 日現在

機関番号：14401

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2012～2014

課題番号：24651189

研究課題名(和文) 放任か制限か？ 親の養育態度と子どもの事故の関係

研究課題名(英文) Which is Better, Noninterference or Restrictive Response? - Relationships between Parents' Nurturing Attitudes and Children's Accidents -

研究代表者

臼井 伸之介 (USUI, SHINNOSUKE)

大阪大学・人間科学研究科・教授

研究者番号：00193871

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、親の養育態度や安全対策等の意識・行動と子どもの事故発生の関係を明らかにすることである。質問紙調査は1～4歳児の親674名を対象に行われた。

分析の結果、安全に対する育児態度は、「放任型(27.9%)」、「現実容認型(48.9%)」、「管理型(14.7%)」の3つに分けられた。育児態度と子どもの事故・ヒヤリハット発生数との関連では、現実容認型にやや回数が多かったものの、その違いに有意差はなかった。また安全対策において、管理型は放任型より、リスクを遮断し、子どもの行動を制限する対策が多かった。

研究成果の概要(英文)：This study seeks to clarify the relationships between parents' consciousness and actions such as nurturing attitudes and measures to promote safety and reduce the frequency of children's accidents. A survey was sent to 674 parents who have children aged 1 to 4 years.

Analysis results indicated that parents' nurturing attitudes with respect to safety can be divided into three types: "Noninterference (27.9%)," "Reality acceptance (48.9%)," and "Management (14.7%)."

When looking into nurturing attitudes and the frequency of children's accidents and near misses, the frequency of accidents was slightly higher in Reality acceptance; however, there were no significant differences from other types. To maintain safety, Management-type parents took measures such as avoiding risks and restricting children's actions more frequently than Noninterference-type parents.

研究分野：産業心理学

キーワード：社会系心理学 子ども事故防止 ヒューマンエラー 養育態度

1. 研究開始当初の背景

少子高齢社会が問題視されている現代社会において、女性1人あたりの出生率は1.37人まで落ち込んでおり、今後大幅に増加することはしばらく見込めない。一方子どもの死亡原因を見ると1～4歳では不慮の事故が最も多く、その数(163人)は全体の約25%を占めており、子どもの事故防止の効果的な対策の構築は、危急な課題となっている(H20年度厚生労働省データ)。

子どもの事故発生には親の養育態度や安全意識の関与が考えられる。例えば須永他(1990)は幼稚園児を対象とした質問紙調査で、放任的な養育態度の親の子どもに事故や怪我が多いことを示している。一方猪野・石川(1995)は親の養育態度と子どもの事故に関係ないことを報告している。筆者はこれまで成人の事故防止に係る心理学的研究に従事してきたが、そこでは安全意識と事故発生には有意な関連があることが示されている(例えば臼井1987,2008)。

一方、親の養育態度や安全意識、また実際に行っている安全対策など調査し、それらと子どもの事故の種類や回数等との関係を実証的に調べた研究は少ない。特に親への依存度が強い就学前の1～4歳児では、親の意識や行動が子どもの事故に大きく関与することは明らかである。そのためには子どもには「強く、たくましく」育ててほしいという親の願望は通念としてはあるが、一方子どもの行動は制限・管理した方がよいという考え方もあり、安全面に関してはどちらが望ましいかは不明な部分も多い。そこで、親の養育態度や安全対策等の意識・行動と子どもの事故発生の関係について、実証的に検討することは子どもの事故防止の効果的な手法を講じる上できわめて意義深い。

2. 研究の目的

本研究の目的は、親のいかなる養育態度が日常の安全対策や実際の事故発生に結びつ

き、どのような態度や行動が子どもの安全性向上には好ましいのかをインタビュー調査と質問紙調査から実証的に明らかにする。特に親の養育態度に関しては、怪我をすること、行動を制限することの2つの視点のにおける許容 - 拒絶の軸があると考えられるが、本研究ではこれらの組み合わせから親の養育態度をタイプ分けし、それらと実際の事故発生との関係について検討する。

3. 研究の方法

研究は以下の手順で実施された。

- (1) インタビュー調査: 子どもを育てる上で特に安全面についての意識や実態調査、および質問紙調査での項目作成の資料とするため、インタビュー調査を実施した。調査場所は大阪府下A市内の子育て支援施設2箇所で、インフォーマントは支援施設に通う乳幼児の母親20名であった。質問は半構造化面接に即して行い、聞き取り項目としては、子どもの性別、年齢、きょうだい構成などの基本的な属性の他、事故やヒヤリハット体験の内容、日頃実施している安全対策、子育てについての考え方、子どもが怪我をすることへの抵抗感、子どもの性格等の特性、安全面で日頃気になっている点などであった。
- (2) 質問紙の作成: インタビュー調査の結果に基づき、本調査に使用する質問紙を作成した。作成した質問紙は、子どものパーソナリティに関する質問である“子どもの特性”13項目、子どもの育児に関して、放任か制限するかなどの“安全に係る育児態度”3項目、放任 - 制限という安全に係る育児態度の背景にあると考えられる“一般的育児態度”6項目、日常生活において実施している子どもの安全確保のための具体的な“安全対策”16項目、具体的な事故・ヒヤリハット体験についての“過去1年間の事

故・ヒヤリハット経験” 15 項目、“親子の属性” 6 項目の全 59 項目で構成された。

- (3) 質問紙調査の実施：大阪府下の A 幼稚園（在園児数 474 名）、三重県下の B 幼稚園（在園児数 200 名）の協力を得て、園児の保護者 674 名を対象に質問紙を配布した。2 週間後に 423 の質問紙を回収した（回収率 62.8%）。

4. 研究成果

分析から得られた主たる結果を以下に記す。

- (1) インタビュー調査の結果、インフォーマントの事故・ヒヤリハット経験回数は 0 回 4 人、1 回 9 人、2 回 7 人であり、その内容では転倒・転落が全体の 57%、衝突が 26%を占めていた。安全対策では、家具の角にクッション（11 人）、階段・玄関に柵（8 人）が多く事故内容と関連していた。また誤飲は経験数 2 名と少なかったが、危険物を手の届かないところに置くと答えたインフォーマントが 7 名おり、対策は経験だけでなく、重大性の認識にも関連することが示唆された。また、子どもの怪我に対する抵抗感では、子育て開始時は「怪我をさせたくない」という思いが強いが、事故・ヒヤリハット経験や子どもの学習能力を認識するにつれて、「少しくらいの怪我なら仕方ない」とその認識が変化する過程が伺えた。
- (2) 質問紙において、安全に対する育児態度は、「子どもはある程度怪我するのは構わない：以下怪我許容傾向」と、「遊びはある程度制限した方がよい：以下遊び制限傾向」の 2 項目で測定された。クラスター分析の結果、「怪我許容傾向が高く、遊び制限傾向は低いタイプ：以下放任型（27.9%）」、「怪我許容傾向および遊び制限傾向どちらも高いタイプ：以下現実容認型（48.9%）」、「怪我許容傾向が低く、

遊び制限傾向が高いタイプ：以下管理型（14.7%）」の 3 つのタイプに分かれることが明らかになった。

- (3) 育児態度の 3 タイプと子どもの性別、子どもの年齢、出生順位の関連を調べた結果、それらすべてに差はなかった。また、子どもの事故・ヒヤリ経験との関連では、現実容認型がやや回数が多かったが、有意な差ではなかった。また安全対策 16 項目を因子分析した結果、「いつも子どもの行動を確認している」「ブランコなどの安全な乗り方を教えている」などの「見守り・教育対策」と、「熱いお茶などを子どもから遠ざけている」「ストーブ等危険物にはガードで遮断している」などの「リスク遮断・行動制限対策」の 2 つに分けられた。それら対策と育児態度との関連を調べた結果、「見守り・教育対策」では違いが見られないが、「リスク遮断・行動制限対策」において、管理型は放任型より有意に高かった。今後は今回の結果を踏まえて、さらに縦断的な研究を継続する必要がある。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕(計 4 件)

- 1) 臼井伸之介 2012 人はなぜ危ないことをするのか？, クレーン, 50(4), 4-8.
- 2) Shingo MORIIZUMI & Shinnosuke USUI 2012 Situational Consistency of Risk Taking in Daily Life, Japanese Journal of Applied Psychology, 応用心理学研究 (英文特集号), 38(Special Edition), 52-57.
- 3) 臼井伸之介 2014 ヒューマンエラーや規則違反はなぜ起こる？(1), 危険物新聞, 9月号(第 729 号), 4-5.
- 4) 臼井伸之介 2014 ヒューマンエラーや規則違反はなぜ起こる？(2), 危険物新聞,

10月号(第730号), 2-3.

〔学会発表〕(計 6 件)

- 1) Shingo MORIIZUMI, Shinnosuke, & Hiroshi NAKAI 2012, 8 The Effect of Tendency to Take Risks in Daily Life on Future Accident Involvement. 5th International Conference on Traffic & Transport Psychology, Groningen, the Netherland.
- 2) Yasunori KINOSADA & Shinnosuke USUI 2013 The Influence of Perceived Vulnerability on the Estimation of Time-to-contact with an Approaching Vehicle 日本認知心理学会第 11 回大会発表論文集, 1.
- 3) 紀ノ定保礼・臼井伸之介 2013 脆弱性認知は常にリスク回避を予測するか? - 道路横断行動を題材とした検討 -、日本心理学会第 76 回大会発表論文集, 930.
- 4) 中井 宏・岡真裕美・臼井伸之介 2014 小学校における安全教育プログラム「校内版ひなどり」の実践 日本人間工学会平成 26 年度中国四国支部・関西支部合同大会論文集, 140-141.
- 5) 岡 真裕美・安達悠子・中井 宏・臼井伸之介 2014 救急搬送データにおける 6 歳から 12 歳児童の事故の分析 日本人間工学会平成 26 年度中国四国支部・関西支部合同大会論文集, 62-63.
- 6) 森泉慎吾・臼井伸之介 2014 低リスク状況下におけるリスクテイキング 日本心理学会第 78 回大会発表論文集, CD-ROM

〔図書〕(計 3 件)

- 1) 臼井伸之介 2012 コラム 2 行動レベルに影響を与える判断エラー, 「リスクの社会心理学」, 中谷内一也編, 有斐閣, 47-48.
- 2) 臼井伸之介 2013 リスク認知と安全行動, 「産業安全保健ハンドブック」, 小木和孝編集代表, 労働科学研究所 378-381.

- 3) 臼井伸之介 2013 ヒューマンエラー, 注意と安全, 「認知心理学ハンドブック」, 日本認知心理学会編, 有斐閣, 110-113.

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

臼井 伸之介 (USUI SHINNOSUKE)
大阪大学・大学院人間科学研究科・教授
研究者番号: 00193871

(2) 研究分担者

森泉 慎吾 (SHINGO MORIIZUMI)
大阪大学・大学院人間科学研究科・特任研究員
研究者番号: 50735066

(3) 研究協力者

中井 宏 (NAKAI HIROSHI)
大阪大学・大学院人間科学研究科 助教

安達 悠子 (ADACHI YUKO)
大阪大学・大学院人間科学研究科 助教

紀ノ定 保礼 (KINOSADA YASUNORI)
大阪大学・大学院人間科学研究科 助教

岡 真裕美 (OKA MAYUMI)
大阪大学・大学院人間科学研究科・博士前期課程 2 年